

ヨハネ福音書におけるイエスの十字架の死

—ヨハネ福音書19章16b—30節の資料問題—

中山 貴 子

序

I ヨハネ福音書19章16b—30節と共観福音書との比較

- (1) ヨハネ福音書における受難物語
- (2) 共観福音書の十字架報知との比較

II ヨハネ福音書19章16b—30節の分析

- (1) 伝承と編集の問題
- (2) 資料問題

結

序

福音書におけるイエスの十字架の死の理解の多様性とその変遷過程を明らかにすることが筆者の継続的な課題である。その際福音書記者のイエスの十字架の死についての解釈を表わす最も重要な手掛りが、受難物語の十字架報知の中心であるイエスの十字架上の言葉である。

そのため最古の受難物語伝承を保持、編集しているマルコの十字架報知15・33—39（15・42—47の埋葬物語との関連も含む）を起点として、その平行記事であるマタイ27・45—54およびルカ23・32—48（行伝7・54—60との関連も含む）をイエスの十字架上の言葉を中心に比較検討してきた。その結果、共観福音書におけるイエスの十字架の死の理解、その多様性と変遷過程とをある程度明らかにすることができたと思う¹⁾。

ところでこれらはヨハネ福音書の受難物語の十字架報知19章16b—30節、特にイエスの十字架上の言葉を中心とした25—30節とどのような関係にあるのだろうか。そこでイエスの十字架上の言葉を中心としたヨハネ福音書の十字架報知と共観福音書のそれとを比較検討することで、イエスの十字架の死についてのヨハネの理解を明らかにし、共観福音書、特にマルコ

1) 広島女学院大学論集23, 25, 29, 30, 31, 32集および新約学研究10号の拙稿が本稿の前提となっている。特に全体を通じての問題の所在については23集参照。

の理解とどのような位置関係にあるのかを新しい課題として考えてみたい。本稿ではまず、ヨハネ 19・16b—30 の資料問題を取りあげ、次の積義的・神学的研究の基礎的考察とした。

I ヨハネ福音書19章16b—30節と共観福音書との比較

(1) ヨハネ福音書における受難物語

ヨハネ福音書が、マルコ福音書の系列下にあるのではなく、全く別個の独立した福音書であることは周知の通りである。現行のヨハネ福音書のテキスト、順序については問題が多い²⁾。しかし受難物語18・1—19・42(31—42の埋葬物語も含む)は、福音書記者ヨハネの編集段階において、現在の Kontext に位置しており、19・16b—30 のテキスト、順序も現行のままであった³⁾。本文批評上の問題も特に存在しない。

ただヨハネの受難物語とマルコの受難物語14・1—15・42とを比較すると、ヨハネの場合はマルコの叙述のいくつかがすでに受難物語以前の叙述部分に組みこまれている⁴⁾。例えば①マルコ14・1—2の受難物語の序にあたるイエス殺害の決議はヨハネ11・47—57に②マルコ14・3—9のベタニヤにおけるイエスの塗油物語は、“あらかじめ葬りの用意をした”ことで15・42—47の埋葬物語とも関連しているが、ヨハネ12・1—11ではラザロのよみがえりの物語と関連して述べられている。③マルコ14・10—11, 17—21, 43—45のイスカリオテのユダの裏切りの過程は、ヨハネ12・4—6の塗油物語の一部分として、13・21—30の弟子の裏切りの予告の一部分として述べられ18・2以下の逮捕の場面に続いている。④マルコ14・12—16の過越の食事の準備の叙述はなく⑤マルコ14・22—25の最後の晚餐の聖餐式的性格は、ヨハネ13・1—20の最後の夕食にはなく、すでにヨハネ6・1—14の5,000人の供食物語に具体化されている。⑥マルコ14・27—31の弟子たち、ペテロの裏切りの予告はヨハ

2) 例えば 5・3b—4, 7・53—8・11 の P^{65,75} ✠ B A C^vid における欠如, 20・19—31と対比して明らかに付録である21章など。従って現行ヨハネ福音書のテキストにおいては、伝承資料、福音書記者の段階だけではなく、これらを挿入付加した後の編集者をも考慮しなければならない。E. Haenchen: *Johannes Evangelium*, 1980, S. 44-57, 74-103. なお現存する新約聖書最古の写本である P⁷⁵ が、ヨハネ受難物語18・31—33, 37—38を含んでいることは注目すべきである。

3) 但し Bultmann によれば、18・1—20・31は、14・31の“立て。さあ、ここから出かけていこう”を受けて 18・1b “弟子たちと一緒にケデロン谷の向うへ行かれた”に続くという。R. Bultmann: *Hirschs Auslegung des Johannes Evangelium*, EvTh4 (1937) S. 115-142, Haenchen, *Johannes*, S. 53の引用による。

4) J. Becker: *Das Evangelium nach Johannes II*, 1981, S. 531-539. ヨハネの持っていた受難報知の基本的構造は、A) イエス殺害決議から自分の者たちとの別離まで B) 逮捕から埋葬まで C) 空虚の墓の発見から弟子たちへの出現の3つの部分であったという。

- ・イエスの十字架刑, 2人の者が共に十字架につけられたこと ヨハネ 19・18 マルコ 15・24a, 27 parr.
- ・「ユダヤ人の王」の罪状書 ヨハネ 19・19 マルコ 15・26 parr.
- ・ローマ兵士たちによるイエスの衣服の分割 ヨハネ 19・23f. マルコ 15・24b parr.
- ・酔いぶどう酒 ヨハネ 19・29 マルコ 15・36 parr. (ルカは削除)
- ・イエスの十字架上の言葉 ヨハネ 19・30 マルコ 15・34bc parr.
- ・女たちの存在 ヨハネ 19・25 マルコ 15・40 parr.

b) 相違する点

α) ヨハネの十字架報知に欠如しているもの

- ・クレネのシモンモチーフ マルコ 15・21 parr.
- ・時の知らせモチーフ マルコ 15・25, 33 parr.
- ・十字架刑以前の没業をまぜたぶどう酒 マルコ 15・23 parr.
- ・通行人, 祭司長たち, 律法学者たち, 共に十字架につけられた者たちによる嘲弄
マルコ 15・29—32 parr.
- ・τέρατα (暗やみ, 神殿の前幕が裂ける) マルコ 15・33, 38 parr.
- ・エリヤモチーフ マルコ 15・35f. parr. (ルカは削除)
- ・異邦人百卒長の告白 マルコ 15・39 parr.

β) ヨハネのみの叙述

- ・イエスは自ら十字架を負う 19・17a
- ・ピラトの τίτλος に対するユダヤ人祭司長たちの抗議 19・20—22
- ・イエスの下着のくじ引きと聖書証明 19・24bc
- ・イエスの母と愛弟子へのイエスの十字架上の言葉[A] 19・26f.
- ・イエスの十字架上の言葉[B]と聖書証明 19・28

しかしながら, a) の共通点についても細部においては相違点も多く, ヨハネのイエスの十字架の死理解からくる伝承資料の改訂がある。

①イエスと共に十字架につけられた2人の者は, マルコ 15・27 (Mt 27・38) のように, 元来略奪者・常備兵・傭兵を意味し, 転じて強盗やゼロテを表わした *λήσταις*⁸⁾ ではなく, 単に *ἄλλους δύο* となっている。彼らはまたイエスを嘲弄することもない。これはすでに, ルカ特殊資料23・39—43において, マルコ 15・32b の全面的改訂を行いきわめて対照的な二通りのふるまいに書き分けることで, 新しく罪人の悔い改めと信仰告白モチーフを導入するために, *λήσταις* を *κακούργος* (新約聖書では他に 2 Tim 2・9 のみ) と変更したルカ

8) ThWB IV S. 267.

の思想をさらに展開したものといえよう⁹⁾。イエスの十字架の死を、栄光、父なる神への帰還として捉えるヨハネにとって、*λήστης* もしくは *κακούργος* の限定は不要であるばかりか、ヨハネの神学と一致しない。従って、イエスと共に十字架につけられた者のモチーフは、前ヨハネ伝承の単なる保持であって特別の意味を持ってはいない。後述するように、*μέσον δὲ τὸν Ἰησοῦν* の挿入によって、むしろイエスの王権を強調する道具だてになっているにすぎない。

②マルコ 15・26の罪状書 (*ἡ ἐπιγραφή τῆς αἰτίας*, Mt 27・37 *τὴν αἰτίαν αὐτοῦ γεγραμμένην*) は、明確な *αἰτία* の付加語を伴っている。ルカ 23・38は *αἰτία* を削除して *ἐπιγραφή* のみにとどめている。しかしヨハネ 19・19f. は、*τίτλος* という新約聖書、LXX に他に用例のない言葉を用いている。ラテン語の *titulus* も一般的な碑銘、書名から尊称、名誉の称号までを意味している。従ってヨハネの場合は、罪状書というよりもむしろイエスの王たることの尊称として用いられていると見てよい。その内容もマルコ 15・26 (Mt 27・37, Lk 23・38) の *ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων* に対して、18・5, 7の「ナザレのイエス」と結びついて *Ἰησοῦς ὁ Ναζωραῖος ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων* と改訂されている。

③マルコ 15・24b (Mt 27・35b, Lk 23・34b) は、詩篇 22・18に基づいてイエスの衣服のくじ引きによる分割のみを述べている。しかしヨハネ 19・23f. では、*ἱμάτιον* を4つに分けることと、縫い目のない直接肌に着る *χιτῶν* のくじ引きの2つの行為に拡大している。さらに聖書証明のための引用も直接行っている。

④酔いぶどう酒は、マルコ 15・36 (Mt 27・48) の *κάλαμος* に対して、*ὑσσωπος* の茎でさし出されている。

⑤最も重要なイエスの十字架上の言葉は、ヨハネの十字架報知ではルカと同様全面的な拡大改変が行われ、マルコ、マタイ、ルカとは全く異なる内容となっている。順序に従い、その言葉を[A]イエスの母と愛弟子へのもの、[B] *δίψω*, [C] *τετέλεσται* とに分けることにする。いずれもヨハネのイエスの十字架の死の理解を表わしていることは、マルコ 15・34bc (Mt 27・46), ルカ 23・34a, 46 が福音書記者の神学に基づく意図的編集の表明であることと同様である。しかしながら共観福音書のように、イエスの十字架上の言葉と異邦人百卒長のイエスに対する信仰告白との関係はヨハネには存在しない。

⑥十字架刑を見る女たちの名前リストは、マルコ 15・40がマグダラのマリヤ、小ヤコブ

9) 殉教者の模範としてのイエスの十字架の死は、同時に罪人の悔い改めと赦しをもたらすのである。いわゆる“*Christus in cruce regnans*”や“最後の瞬間における悔い改めの模範”(Bultmann: *Geschichte*, S. 307)のモチーフがみられる。拙稿29集139—143頁。

とヨセの母マリヤ、サロメ、マタイ27・56がマグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフの母マリヤ、ゼベダイの子らの母マリヤである。ルカ23・49には名前のリストがなく、すでに8・3に述べられている(マグダラのマリヤ、ヨハンナ、スザンナ)。ヨハネの名前のリストとはマグダラのマリヤだけが一致している。ただマルコ15・40の十字架刑の証人としての女たちと、47節の埋葬の証人としての女たちと、16・1の復活の朝の証人としての女たちの3つの名前のリストも異なっていて、これもマグダラのマリヤだけが一致している。

共観福音書は、彼女たちがイエスのガリラヤにおける活動の時も彼に従って仕えた女たちであると述べることによって、十字架刑・埋葬・復活の重要な証人としてだけではなく、イエスの全生涯に対しての *Nachfolge* のモチーフを強調しているが、ヨハネにはそのような女たちのイエスへの *Nachfolge* モチーフは全く見られない。さらに共観福音書では、女たちはイエスの十字架刑を“遠くから”見ていたが、ヨハネ19・25ではイエスの十字架の死以前に、しかも十字架の傍らに立っておりその位置が変えられている。

以上のように、細かい相違点にもかかわらずヨハネの十字架報知と共観福音書のそれとの間にある共通のモチーフの存在が、両者の文献学的関連の問題を提示する。そこでヨハネ19・16b—30の資料問題を、前ヨハネ伝承とヨハネの編集・形成を中心に分析することでさらに検討してみよう。

II ヨハネ福音書19章16b—30節の分析

(1) 伝承と編集の問題

この問題について、現在最も専門的な研究を行っている Dauer¹⁰⁾ の分析をおもに取りあげながら考えてみたい。

16b節

Dauer はイエスの引き取りを表わす *παραλαμβάνειν*¹¹⁾ が、ヨハネ1・11と14・3以外には用いられていないこと、16aの *παραδιδόναι* と対になっていることから前ヨハネ伝承に由来するとみている。イエスの引き取りはマルコ(マタイも・ルカは異なる)では、むち打ちとローマ兵士たちによる紫の衣、いばらの冠による嘲弄の間に行われ(Mk 15・15—20)、十字架刑執行に至る具体的行為者がローマ兵士であることも明白に示されている。それに対して、ヨハネ19・16bの主語は、14f.のユダヤ人ないしは祭司長たちで18節の十字架刑執

10) A. Dauer: Die Passionsgeschichte im Johannesevangelium eine traditionsgeschichte und theologische Untersuchung zu Joh 18・1—19・30, 1972, 特に S. 165—216 参照。

11) それに対して Mt 16回, Mk 6回, Lk 6回, Apg 6回, Dauer: Passionsgeschichte, S. 166 Anm. 11.

行の主語もそのように読むことができる。ローマ兵士たちは、ヨハネでは23節以下ではじめて明らかに出てくる。このことから、元来の前ヨハネ伝承資料における 16b の位置が 16b →19・(1b)2f. →19・17 であったのを、ヨハネが構成上の曖昧さを無視しても、イエスの十字架刑に対するユダヤ人の責任をより先鋭化させるために行った位置転換として考えることもできる¹²⁾。

17節

Bultmann は、マルコ 15・21 parr. のクレネのシモン伝承と 17a の βασιλάζων ἐαυτῶ τὸν σταυρὸν の叙述との矛盾を、ヨハネが別の伝承を基礎にしたためであると単純に説明している¹³⁾。確かに βασιλάζειν¹⁴⁾ はヨハネの用法としてはまれで、しかもルカ 14・27 の Nachfolge 要請の βασιλάζει τὸν σταυρὸν ἐαυτοῦ ときわめてよく似た表現でもある。またルカ 23・26 のクレネのシモン伝承は、マルコよりももっと明白にイエスへの Nachfolge モチーフを示している。従って 17a は、元来イエスへの Nachfolge モチーフを持ったクレネのシモン伝承だったのを、父からあらかじめ示された道を最後まで従順に歩いたイエスの父への Nachfolge を強調するために、ヨハネが 17a を現行のように改訂したのではないか。Dauer も ἐαυτῶ そのものにヨハネの強調点があるのではなく、受難におけるイエスの自由意志・優越性を示すためのヨハネの形成であると述べている¹⁵⁾。実際共観福音書は、イエスが十字架を負うたことを明記しないで、直ちにクレネのシモンについて述べている。おそらくヨハネは前ヨハネ伝承に存在したであろうクレネのシモン伝承を削除して、イエスが十字架を負うたことをより強調したのであろう¹⁶⁾。

17b は伝承資料に由来するが (vgl Mk 15・22, Mt 27・33, Lk 23・33), ὁ λέγεται (この様式は新約聖書においては、他に Joh 1・38, 20・16 のみ) と Ἐβραϊστί (Joh 5・2, 19・13, 17, 20, 20・16, Apk 9・11, 16・16 のみ) は、ヨハネ的表現といえる。

18節

すでに述べたように λήστης (Mk 15・27, Mt 27・38) や κακοῦργος (Lk 23・32f., 39)

12) ヨハネ福音書におけるユダヤ人の問題については、R. Leistner: Antijudaismus im Johannesevangelium?, 1973, S. 71-141 参照。

13) Bultmann: Johannes, S. 517 Anm. 4.

14) Joh 10・31, 12・6, 16・12, 19・17, 20・15. 新約聖書において Mt 3回, Mk 1回, Lk 5回, Apg 4回, Pls 6回, Apk 3回 Dauer: Passionsgeschichte, S. 167 Anm. 13.

15) Dauer: Passionsgeschichte, S. 169, Anm. 18.

16) Dodd のように、共観福音書とヨハネとの相違の説明として、ヨハネが十字架への道の始めの部分で、共観福音書はその途中の出来事を記したのだとする説 (Historical Tradition in the Fourth Gospel, 1963, p. 125 Anm. 2), Haenchen のように前ヨハネ伝承に欠如していたとする説 (Historie und Geschichte in den johanneischen Passionsberichten, 1967, S. 76.) には根拠がない。

を *ἄλλους* (*δύο*) に変えたのはヨハネである。しかも18・40でバラバを *λήστης* として表わし、両者を明白に区別している。変更の理由を Dauer は、彼らをもしも *λήστης* とすると、18・28—19・16a にもかわらず、イエスが政治的な理由から処刑されたという印象を与えることになるからであるという¹⁷⁾。また Bultmann は、ヨハネが十字架上のイエスに、特別の卑下もしくは旧約聖書の預言の成就 (Jes 53・12, vgl Lk 22・37) を殆ど考えていないためとみている¹⁸⁾。

ヨハネはさらに *μέσον δὲ τὸν Ἰησοῦν* によって、その場所が王であるイエスにふさわしい尊厳に満ちた玉座であることを強調する。ユダヤ人の慣習においては、3人の人間がいる場合、最も有力な者を常に真ん中におくのが一般的であり、このような考え方はマルコ10・37のゼベダイの息子たちの話や、マタイ25・31—33の終末時の審判の話などにもみられる。

これはイエスの十字架刑を栄光ある高挙として描く、ヨハネの意図的形成である¹⁹⁾。

19節

犯罪人の名前・犯罪名・判決内容を公示することは、ローマおよびユダヤの慣例である²⁰⁾。そのためイエスの罪状書は、おそらく史的事実として伝承に記されていたと思われる。

共観福音書は、その書き手については何も述べてはいないが、ヨハネは20—22の叙述のためにもピラトがこれを書いたことを明らかにする必要がある。マルコ 15・24 parr. では、罪状書はイエスの衣服のくじ引きの後に記されているが、ヨハネはそれ以前に持ってきている。この配置換えは伝承に由来するものなのか、あるいはヨハネの編集によるものなのだろうか。まず18節は、内容的に19—22をとびこえて23節の *ὅτε ἐσταύρωσαν τὸν Ἰησοῦν* の副文章なしに直接続いている。それに対して、22節と23節の結合は不適切であって、それを柔らげるために 23a の *ὅτε.....'Ιησοῦν* を再び挿入したもののようである。Bultmann も、23a が元来は、19—22をとびこえて18節と結合していたのを、19—22の分断の結果 *ὅτε.....'Ιησοῦν*

17) Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 177. 言語上の考察から証明することは難かしいので (*ἄλλος* Joh 約 30回, Mt 約29回, Mk 約22回), もっぱらヨハネの神学による改訂であろう。すでにルカ自身が神学的意図に即して改訂しているからである。

18) Bultmann: *Johannes*, S. 518 Anm. 1.

19) 古代ユダヤにおける慣習については, Strack-Billerbeck: *Kommentar zum Neuen Testament I*, S. 825f. B. F. Westcott: *The Gospel according to St. John*, 1971, p. 274 は、この付加文で、キリストは苦難においても王として君臨することをヨハネが強調しているという。そのほか E. Hoskyns: *The Fourth Gospel*, 1947, p. 528, Schnackenburg: *Johannes III*, S. 310 など。

20) ローマの慣例によれば、刑場へ連行される犯罪人自身が、この板を首からつるしたり運んだりした。Suetonius: *De Vita Caesarum Caligula* 32 "praecedente titulo qui causam Poenal indicuret", Cassius Dio 54・8. ユダヤ教の律法においても判決理由の公示は慣例であった。例えば Sanh 6・1 Strack-Billerbeck I, S. 1038.

によって再び状況説明を開始するために行った必然的な挿入であるとみている²¹⁾。ὅτε…… Ἰησοῦν が23節の流れを妨げていること、接続詞 ὅτε がヨハネ福音書に非常に多いこと (19回)、20—22の叙述を導入することを目的としていることなどから、このような配置換えはヨハネ自身によるものとみてよいだろう²²⁾。

マルコ15・26の ἡ ἐπιγραφή τῆς αἰτίας を、王としての尊厳を表わすために、τίτλος というヨハネのみの用語に変更したことはすでに述べたとおりである。それはおそらく共観福音書と同様、前ヨハネ伝承においても元来罪状書であったものを、20—22において、ピラトをして全世界にイエスの王たることを十字架上から宣言させるためのものとしたのである。「ナザレ人イエス」は、ヨハネ受難物語の18・5、7にのみ出てくる表現であるが、「ユダヤ人の王」と組み合わせることで τίτλος の内容をより完成されたものとしたのかもしれない²³⁾。

20—22節

ピラトの τίτλος とそれに対するユダヤ人祭司長たちの抗議やピラトの回答などは、共観福音書や外典福音書にも存在しないヨハネ特殊資料である²⁴⁾。Bultmann は、19・12b のユダヤ人たちの反論、19・15c の祭司長たちの反論などのモチーフがここにもみられることと、23a が20—22の流れを破っていることなどからヨハネの形成と主張している²⁵⁾。Dauer は、他の多くのヨハネ特殊資料が実は、古い埋もれていた伝承資料の採用であったということもあるので、ヨハネの形成かどうかは慎重な検討を要すると前置きして以下の2点から考察をすすめている²⁶⁾。①20—22の史実性が疑わしいということ、②言語・構成技法・神学的傾向がヨハネを示しているということについてである。以下彼の検討を取りあげてみよう。

①について

①19・21以下の祭司長たちの抗議は、共観福音書の叙述と矛盾している (vgl Mk 15・32, Mt 27・42, Lk 23・35 によれば、彼らはイエスをイスラエルの王キリストと呼んで嘲弄している。Pet-Ev 4 においても“そして彼らは十字架を立てた時「この男はイスラエルの王である」としるした”とある)。τίτλος を読んだギリシャ、ローマ人からユダヤ人全体に対

21) Bultmann: Johannes, S. 515.

22) vgl Mk, Mt, Lk 各12回, Apg 10回, Pls 18回, IPet 1回, ὅτε οὖν は Joh 8回。

23) Dauer: Passionsgeschichte, S. 176f. ヨハネの十字架報知でも遅く成立した19節を、ヨハネが高挙の神学に合わせて、いくつかの点を改訂して採用したのだとみる。

24) ニコデモ福音書 I. 2 は Joh 19・20 の影響かもしれない。Dauer: Passionsgeschichte, S. 177. Anm. 82.

25) Bultmann: Johannes, S. 155.

26) Dauer: Passionsgeschichte, S. 177-182.

する嘲弄として、皮肉にも我が身にふりかかってくる、はじめてピラトに訂正の申し入れをするに至ったのだという解釈がたとえ成り立つとしても、それはあくまで推測にすぎない。

㊤ *τίτλος* が3ヶ国語で記されたことはありえないことではないが、ピラトが果してイエスの場合に適用したかどうかは疑問である。むしろ3ヶ国語の *τίτλος* は、ヨハネ神学に由来すると考える方が適切である²⁷⁾。以上の Dauer の指摘は、史実性の根拠を裏づけるものが全く存在しないこともあって、いずれも適切な主張である。

②について

㊤ 言語上の形成、20節の *οὖν* はヨハネ特有の *οὖν-historicum* であること、*τούτον τὸν τίτλον* のヨハネ的文体、*πολλοὶ.....τῶν Ἰουδαίων* がヨハネの多用する *οἱ Ἰουδαῖοι* であり、しかもヨハネの好む言語の分綴であること、同様に *ἐγγρὸς ἦν ὁ τόπος τῆς πόλεως* も分綴、*ἐγγρὸς, ἦν τετραμμένον, Ἑβραϊστί* などのヨハネ的表現、*Ῥωμαῖστί* は聖書の Hapaxlegomenon、*Ἑλληνιστί* は他に行伝21・37にあるきわめてまれな表現であるが、おそらく *Ἑβραϊστί* に対応させて *Ῥωμαῖος* (11・48) と *Ἕλλην* (7・35) からヨハネが形成したものである。

21節の *οὖν-historicum*、*οἱ ἀρχιερεῖς τῶν Ἰουδαίων* のヨハネ的特色(ユダヤ人の属格結合は新約聖書においてヨハネのみ、3・1ユダヤ人の指導者、18・12ユダヤ人の下役、その他2・6ユダヤ人の宮潔め、2・13、11・15ユダヤ人の過越、5・1、6・4、7・2ユダヤ人の祭、19・42ユダヤ人の準備の日)。Dauerによれば、ヨハネが *τῶν Ἰουδαίων* を用いたのは、「ユダヤ人の王」と「ユダヤ人の祭司長たち」とを対抗させ、ユダヤ人の代表者が彼らの王を拒否するが不成功に終り、ピラトによってイエスの王たることが全世界に宣言されることを意図しているためである²⁸⁾。そのほか *βασιλεὺς εἰμι τῶν Ἰουδαίων* の分綴、*ἐκεῖνος* の用法、22節の *ὁ γέγραφα, γέγραφα* の簡潔な短縮は、13・27の *ὁ ποιεῖς ποιήσον τάχιστα* と同様ヨハネの形成である。

以上20—22には、殆ど一貫してヨハネ固有の言語的特徴があるのに対して、前ヨハネ伝承に属する言語表現を確立することはできない。

㊤ 構成上の技法として㊤ ゴルゴダにおける十字架刑から一転して総督官邸でのピラトとユダヤ人祭司長たちとの論争、さらには再び十字架刑の場面へもどるなどの多様な場面の描写はヨハネ的である(vgl Joh 18・28—19・16a, 4, 7, 9章)。㊤ *τίτλος* の「ユダヤ人の王」を

27) W. Bauer: Das Johannesevangelium, 1933, S. 222, Strack-Billerbeck II, S. 573. Becker: Johannes II, S. 588. しかしこの場合は Haenchen のように、3ヶ国語の世界語がイエスの尊厳を *urbi et orbi* に告知するためである, Der Weg Jesu, 1966, S. 528, Anm. 2, Johannes, S. 551.

28) Dauer: Passionsgeschichte, S. 179.

めぐってのピラトとユダヤ人祭司長たちとの対話の文体が、ヨハネに特徴的な劇的な物語方法と一致する。㉔「ユダヤ人の王」が、祭司長たちにとっては、異邦人世界からのユダヤ民族に対する侮辱として受けとめられる一方、ピラトはこれを用いて結果的にイエスの王たることを全世界に証言するといった二重の意味を含む文体であること。

㉕神学的傾向として、㉖論争的・弁証的側面として、最後の瞬間に至るまでイエスを拒否するユダヤ人=不信仰な世のありようが、20-22のピラトとユダヤ人祭司長たちとの論争で劇的な頂点を迎えること。㉗実証的・神学的側面として㉔にもかかわらず、ピラトによる3ヶ国語の *τίτλος* の公示は、イエスの十字架刑を高举として理解するヨハネの神学と一致する (vgl 8・28, 特に *ὅτι ἐγὼ εἶμι*)。

以上の検討結果から、Dauer は20-22を、ヨハネが伝承上の〈王〉モチーフの援用によって小さな劇的場面を創造して、読み手にイエスの十字架刑を信仰者の視点で理解させるために形成したものと結論づけている。

23-24節

ヨハネは 23a の *ὅτε ἐσταύρωσαι τὸν Ἰησοῦν* を付加して再び伝承へともどっている。処刑された者の衣服を分けることは当時の慣例でもあり²⁹⁾、詩篇22・18による聖書証明は共観福音書にも存在している。従って 23f. の兵士たちによるイエスの衣服のくじ引きによる分割は、前ヨハネ伝承を受け継いだものである。しかしながら、マルコ15・24と比べると伝承の拡大があるため、ここにもヨハネの編集が行われているとみてよい。

共観福音書では、イエスの衣服のくじ引きによる分割をひとつの行為として理解しているのに対して、ヨハネでは詩篇22・18の同義的平行法を“わたしの衣服を分け”と“わたしの着物をくじ引きにする”との2つの行為として扱っている。そのため詩篇 22・18a は4人の兵士たち (vgl Apg 12・4) による *ἐμάτιον* の分割に、22・18b は *χιτών* のくじ引きにと分けられている (24b の聖書引用では *ἐμάτιον* と *ἐματισμός*)。19・23a の *ἐμάτιον* (Joh 13・4, 12, 19・2, 5) は、マルコ 15・24 parr. と一致しており伝承と結びついている。19・23b の *χιτών* は、ヨハネのみの記述であるが伝承かどうかを決定するのは難しい³⁰⁾。ただ 23f. には、特にヨハネ的表現といえるものはないので伝承とみなしてもよい。24b の *ἵνα ἡ γραφὴ πληρωθῆ* は、ヨハネに典型的な旧約聖書の引用形式であることからヨハネの

29) Bultmann: Johannes, S. 519, Anm. 4, J. Blinzler: Der Prozess Jesu, 1960, S. 271, Anm. 38.

30) 新約聖書において、Mk, Mt 各2回, Lk 3回, Apg 1回, Jud 1回。しかしイエスの衣服との関連では出てこない。ヨハネはこの箇所のみ。ヨセフス「ユダヤ古代誌」(秦剛平訳) III 7・4の大祭司の衣服との関連で、縫い目のない *χιτών* にイエスの大祭司職の象徴をみたり、あるいは教会の一致の象徴をみたりする解釈には根拠がない。Becker: Johannes II, S. 589. Bultmann: Johannes, S. 519, Anm. 10, Dauer: Passionsgeschichte, S. 186-191.

形成であろう。24c も後述するようにヨハネの形成である³¹⁾。

25節

十字架刑に立ち会う女たちの叙述は、ヨハネの言語的特徴のみられないこと、女たちが特に何の役割も果していないことなどから前ヨハネ伝承に由来するものとみてよい。ヨハネの女たちの名前のリストは、前ヨハネ伝承に由来する。おそらくイエスの母もはじめから伝承に属していたと思われる。ヨハネの用いた受難物語伝承には、共観福音書の女たちの名前のリストとは異なる別の伝承がすでに存在していたのであろう。

すでに述べたように、共観福音書記者は伝承資料をこえて、女たちのイエスの全生涯にわたる *Nachfolge* モチーフを意図的に編集しているが³²⁾、ヨハネにはそのモチーフはなく、埋葬物語にも女たちは登場せず、空虚の墓物語においてもマグダラのマリヤだけが記されている。女たちの叙述の位置の転換は、26—27に移行するためのヨハネの編集である。Dauer によれば、そのためには、24c と 25a の元来別個の伝承であって内容的に結びついていないものを、ヨハネの構成上の技法である *μέν……δέ* 文を用いて結びつける必要があったのであり、24c はそのために意図的に付加されたのである。

ヨハネのこの構成上の技法とは、イエスの周囲の人々の間に、対照的な一組みの人間を登場させ、信仰の決断を迫るといふ神学思想である。例えば、2・18—22の不信仰なユダヤ人とイエスを信ずる弟子たち、6・66—69のイエスを捨てる多くの弟子たちとペテロ (=12弟子) の信仰告白などがあげられる。ここでは、イエスの衣服のくじ引きをしている4人のローマ兵士たちに表わされる不信仰者と、十字架の傍らに立つ4人の女たち³³⁾に表わされる信仰者との対照がある。

26—27節

イエスの十字架上の最初の言葉[A]は、イエスの母と十字架報知に突然登場する愛弟子とに対するものである。共観福音書にはないこの特殊資料は、25節から 26f. への内容上の移行がぎこちないことや言語上の相違などから、前ヨハネ伝承に属するものではなくヨハネ自

31) この Formel はヨハネ福音書のみ。13・18, 17・12, 変形として *ἵνα πληρωθῆ ὁ λόγος* 12・38, 15・15, Mk 14・49, Mt 26・54 では *αἱ γραφαί* である。

32) 拙稿31集88—90頁。

33) ただ女たちが十字架の傍らに立っていたことについては Dauer はこの *παρά*-Dativ が新約聖書における唯一の例であること、ヨハネは *ιστάναι* の場合、*παρά* は避けて人間の場合は *μετά* (18・5, 18), 事物の場合は *πρός* (18・16, 20・11) を用いていることなどから前ヨハネ伝承に帰している。前ヨハネ伝承が詩篇38・11の“遠く離れて”との関係を知らなかったため、女たちはただ単に十字架の傍らに立っていることになったのだという。Passionsgeschichte, S. 194. Dodd, Haenchen も伝承説。それに対して Bultmann は、26f. の導入のためヨハネが資料の *ἀπὸ μαρκόθεν* を *παρὰ τῷ σταυρῷ* に変えたのだと考える。Johannes, S. 520.

身の形成とみる方が自然である。これに対する Dauer の論証は次のようなものである³⁴⁾。26節の *οὐν-historicum*, *ὁ μαθητής, ὃν ἠγάπα* (13・23, 19・26, 21・7, 20) のヨハネのみに用られている Imperfekt, *γύναί* の呼びかけ (2・4, 4・21, 19・26, 20・13, 15など。イエスの母に対しては新約聖書ではヨハネのみ), *ἴδε* 特に *ἰδὼν.....λέγει ἴδε* の構造(Mk 3・24 のほかはヨハネのみ)。27節の *εἰς* を伴う *λαμβάνειν* (新約聖書では Joh 6・21, 19・27, 2 Joh 10 のみ), *τὰ ἴδια* (家, 故郷の意味では Apg 21・6 以外は Joh 19・27, 16・32 のみ)。以上はヨハネの言語上の特徴である。構成上の技法として, 19・20—22と同様に 27b に物語の中断による説明がある。すなわちイエスの十字架刑の時と場をこえて, 読み手に情報を伝達するためのエピソードが入ってきているのはヨハネ的特徴である (vgl 12・22, 7・39, 11・51f., 12・33)。Dauer の具体的な指摘は, 26—27を史的事実や前ヨハネ伝承と解釈するよりは確実な論拠といえるだろう³⁵⁾。

28—30節

① 28節

共観福音書の十字架報知のイエスの十字架上の言葉の Kontext と最も近い関係にある28—30節は, 前ヨハネ伝承とヨハネの形成とが混在している。Bultmann の分析では, *λέγει διψῶ* の動機のうち *εἰδὼς.....ὅτι ἤδη πάντα τετέλεσται* をヨハネに, *ἵνα τελειωθῇ ἡ γραφή* を伝承資料に帰している³⁶⁾。イエスの十字架上の言葉[B]の *διψῶ* は, 受難物語伝承の重要なモチーフである詩篇22・15の聖書証明に属していることから, 前ヨハネ伝承と考えることができる。*ἵνα.....διψῶ* までの 28b の聖書証明を受けて, 29節の酔いぶどう酒の提供, 30a のそれを飲むイエスが述べられている (Ps 69・21b)。しかしながら, 28a の *εἰδὼς.....τετέλεσται* の分詞構文 (6・61, 13・1, 3, 18・4) は, ヨハネの形成である。Dauer は, その論拠として① 28a の位置が 18・4a と厳密に一致していることに注目する³⁷⁾。

18・4a

19・28a

Ἰησοῦς οὖν εἰδὼς πάντα τὰμετὰ τοῦτο εἰδὼς ὁ Ἰησοῦς34) Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 197-202.35) 史実は勿論のこと, 伝承説を否定する者が殆どである。例えば Bultmann: *Johannes*, S. 515, 521, Schnackenburg: *Johannes*, S. 323, Becker: *Johannes II*, S. 591f. など。共観福音書におけるイエスの母や兄弟などの親族についての叙述に明らかであるだけでなく (Mk 3・31—35), ヨハネにおいてもイエスの活動に無理解であることが述べられている (Joh 7・1—13)。また弟子たちの裏切りや逃亡は, 史実と結びついて伝承に固定されていることから明らかである。36) Bultmann: *Johannes*, S. 516.37) Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 201-204.

ἐρχόμενα ἐπ' αὐτόν.....λέγει *ὅτι ἤδη πάντα τετέλεσται.....λέγει*

ヨハネは受難物語の開始にあたって (18・4), イエスが自分の身に起るすべてのことを知っているとして述べ、最後に十字架の死に際しても (19・28a), イエスはすべてのことが成就されたことを知っているとして再び強調する。そしてこの2つの *εἰδώς* 文がヨハネ受難物語全体の枠を形成している。

㊤ *μετὰ τοῦτο, οἶδα ὅτι* の構成, *πάντα* などのヨハネ的言語表現がある³⁸⁾。

㊦ イエスが自らの受難について知っていることの強調 (vgl 6・64, 13・1, 3, 18・4), イエスは父から委託されたそのわざを成就する (4・34, 5・36) などのヨハネ神学との結合がある。

② 29節

前述したように聖書証明と結びついていること, 23f.と文体もよく似ていること, 特にヨハネ的な言語表現がみられないこと, ヨハネ固有の神学的モチーフが欠けていることなどから前ヨハネ伝承資料に由来している。その資料は, *σπύγγος, ὄξους, περιτιθέμαι, προσφέρειν* などの共観福音書 (Mk 15・36 parr.) とも共通の言葉を持っているが *κάλαμος* ではなく *ὑσσώπος* を用いている。

③ 30節

イエスの十字架上の最後の言葉〔C〕とイエスの死を描く30節にも伝承とヨハネの編集上の形成とがある。Bultmann は〔C〕についてヨハネが元来資料にあった言葉を *τετέλεσται* に置き換えたという³⁹⁾。元来の伝承資料にどのような言葉があったのかを明らかにすることはできない。ただ *τετέλεσται* には, イエスの十字架の死を父のわざの成就として理解するヨハネの神学が集約されている。そのため共観福音書のように, イエスの十字架上の言葉→異邦人百卒長の信仰告白をあらためて必要としない。

30a のイエスが酔いぶどう酒を実際に飲んだことは 28b—29 の聖書証明の歴史化であって伝承に属する。

30b の *κλίνας τὴν κεφαλὴν* の表現は, 後期ユダヤ教, ギリシャ文学, 新約聖書, LXX のいずれにも全く平行記事がない⁴⁰⁾。また *παρέδωκεν τὸ πνεῦμα* も前ヨハネ伝承に由来

38) *μετὰ τοῦτο* Joh 2・12, 11・7, 19・28, Heb 9・27, Apk 7・1, *οἶδα ὅτι* Joh 22回, Mt 10回, Mk 4回, Lk 6回, Apg 8回, *πάντα* 3・31, 35, 4・29, 39, 45, 5・20, 13・3, 15・15, 17・7 Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 202f.

39) Bultmann: *Johannes*, S. 516. Mk 15・34bc か Lk 23・46 のような言葉か, あるいは Mk 15・37 のような言葉のないさげびであると推測している。

40) vgl Xenophon, *Cyrop* 7・3, 4Makk 12・19. *παράδιδόναι* は, ヨハネでは, イエスと関連するのではなく, ユダとイエスの敵にのみ関連させられている。むしろこれに近いのが, Mt 27・50 *ἀφῆκεν τὸ πνεῦμα* で, 伝承の段階ですでに *ἀφῆκεν* から *παρέδωκεν* が出ているとも考えられる。Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 215. しかし7・37—39の霊の授与との関連性を読むことは問題である。ここでの *τὸ πνεῦμα* は純粹に自然的なものである。

するであろう。30b にはヨハネの神学モチーフは特にみられない。

(2) 資料問題

ヨハネ 19・16b—30 の伝承と編集の分析の結果、ヨハネが資料として受難物語伝承を用いていることが明らかとなった。それは Bultmann のいうしるし資料とも説話資料とも異なるものである。ヨハネが用いたこの受難物語伝承の十字架報知は、おそらく下記のようなものであったであろう。

①ピラトの判決によって、イエスはローマ兵士たちに引き取られ、むち打ち、いばらの冠、紫の衣などの嘲弄を受ける。

② (クレネのシモンが十字架を負う)

③彼らはゴルゴダの刑場でイエスを十字架につけ、左右に2人の (*ἀδελφός*) を十字架につけた。

④イエスの衣服を上着は各自が分け、縫い目のない下着はくじ引きとされ、詩篇22・18の聖書証明が行われた。

⑤十字架の上には罪状書が打ちつけられた。

⑥ (イエスに対する嘲弄が行われた)

⑦イエスは、詩篇29・21を成就するために、人々がヒソブの茎につけてさし出した海綿に含ませた酔いぶどう酒を飲み、さけんで頭をたれその魂を渡した。

ところでこの前ヨハネの十字架報知は、Iの項で述べたように、共観福音書の十字架報知と多くの点で一致し共通のモチーフによって構成されている。そのため前ヨハネ伝承資料が、共観福音書伝承を前提としている可能性を全く否定することはできない。しかしながらそのことはヨハネが実際に共観福音書そのものを読み直接資料として用いたということを意味しているわけではない。ヨハネが共観福音書を知っていたという根拠はないからである。

そのため、このような共観福音書の十字架報知との共通性と、しかしなお多い細部にわたっての相違点などから、共観福音書伝承と共通のモチーフ、叙述を持つてはいるが、それとは別個に展開したイエスの苦難と死についての伝承の存在が考えられる。

それはすでに完全な文書資料であったのか、あるいは Dauer の推定するような “*mündliche und schriftliche (=synoptische) Tradition*” とが相互に混じり合い貫きとおっているようなもので⁴¹⁾、しかもマルコの十字架報知に対するマタイ、ルカの改訂編集や特殊伝承を用いて編集した異本の痕跡や影響を認めることができるようなものなのかどうか明確に断定することは難しい。

いずれにせよ、現行の共観福音書の十字架報知との直接の文献学的関連を認めることは

41) Dauer: *Passionsgeschichte*, S. 226.

きない。おそらく 19・16b—30 は、共観福音書伝承とは別個の前ヨハネ受難物語十字架報知を基礎として、ヨハネが自己の神学的意図に合わせて新しい叙述部分を書き入れ拡大改訂編集したものであろう。

結

ヨハネ福音書の十字架報知の 19・16b—30 の資料問題について、下記のようにまとめることができる。

① 19・16b—30 には、共観福音書の十字架報知と多くの共通点を持ってはいるが、それとは別に展開した受難物語伝承が基盤にある。

② ヨハネはイエスの十字架の死の神学理解に合わせて、その伝承資料の改訂や拡大を行い新しい十字架報知を形成した。

③ ヨハネ自身の形成・編集は 17a, 18 *ἄλλους, μέσον δὲ τὸν Ἰησοῦν*, 19 の *τίτλος*, 20—22, 23a, 24bc, 26—27, 28a, 30 の *τετέλεσται* である。

④ 特にイエスの十字架上の最後の言葉[C]の *τετέλεσται* は、マルコ 15・34bc (Mt 27・46), ルカ 23・34a, 46 と同様に、ヨハネのイエスの十字架の死についての解釈を最もよく表わしている。その意味において、ヨハネも共観福音書記者と同じ意図を持って編集しているといつてよい。

以上の資料問題の結果を踏まえて、次にヨハネ福音書におけるイエスの十字架の死の釈義的・神学的考察を行いたい。その際、特に重要な問題としては、ヨハネの意図的編集部分である20—22節の *τίτλος* をめぐる論争、26—27節のイエスの母と愛弟子への言葉（イエスの十字架上の言葉[A]）、30節の *τετέλεσται*（イエスの十字架上の言葉[C]）などがあげられる。